

# 中井貴恵氏

ゲスト◎女優



## 奥深い朗読の世界で、 新たな挑戦を続ける

### プロフィール◎なかい・きえ

早稲田大学在学中の1977年、東宝映画『女王蜂』（監督：市川崑）のヒロインとしてデビュー。以後、映画・テレビで活躍を続け、1982年には東映映画『制覇』（監督：中島貞夫）で日本アカデミー賞助演女優賞。87年に結婚後、アメリカ、札幌に移り住む。現在は絵本朗読ボランティア「大人と子供のための読みきかせの会」の活動のほか、朗読を楽器演奏にのせて物語世界を紡ぐ「音語り」に力を入れている。二女の母。

### 思いがけず女優の道へ

——子どものころからお芝居に興味はあったのですか？

私はもともとNHKのアナウンサーになりたかったんです。でも大学生のときに父（俳優・佐田啓二）の13回忌の法要に参列している写真が週刊誌に載り、それを偶然、映画会社の東宝の方が見つけて映画に出てみないかと誘われました。東宝は当時の人気シリーズだっ

た横溝正史作品『女王蜂』のヒロインとなる新人女優を探していたんです。

ただ、私は演技の世界に興味も関心もなかったし、女優になろうと考えたこともありませんでした。最初は断ったのですが、毎日のように自宅にやってきて、私が「大学をやめたくない、テニスの同好会も続けたい」と言えば、「大丈夫、全部やらせてあげるから」とどんどん口説かれていって（笑）。

私は幼稚園から高校まで一貫して同じミッション系



父・佐田啓二と一緒に(1~2歳)

の学校に通い、周囲から常に“佐田啓二の娘”として見られることにずっと息苦しさを感じていました。だから、大学はまったく違う雰囲気、しかも誰も私のことを知らない学校に進みたかったんです。自分の力でやっと手に入れた自由な生活。それだけは絶対に壊されたくなかったし、壊さないという約束で、最終的にはお受けしました。

——俳優・佐田啓二の娘として周りの期待も大きかったと思います。実際に演じてみていかがでしたか？

台詞がまともにしゃべれない。右手と右足が一緒に出る。もう、ひどいものでした(笑)。監督の市川崑さんからは、私があまりに演技ができないので、緊張せずに台詞が言えるようにと、「腕をさすりながら言ってごらん」なんてことまで指示をいただきました。

期待されていることがわかるだけに、できない自分が苦しかったですね。父に申し訳ないという気持ちもすごくありました。

——しかし、その後は多くの映画やドラマに出演、活躍をされます。

私は演技を正式に学んだこともないし、まさに実践あるのみで無我夢中でやってきました。やっと少し自信が生まれて、演じる面白さを感じられるようになってきたのは、女優になって5年くらいしてから。

ただ、そのころにはかなり仕事が忙しくなって、特に25、26歳の2年間は1日も休みがない状態。その後も同じような忙しさが続いて、自分の中で今度は不安が芽生えてきたんですね。というのも、私は女優としてだけではなく、一人の女性として生きたいという思いがありました。やっぱり結婚もしたいし、子どもだって産みたい。でも、今の状態のままではそれができなくなるかもしれない。

自分を見つめ直すために少し休みたいと思ったのですが、ただ単に休ませてくださいでは通用しません。

そこで思いついた口実が留学です。自分で留学先を探して、28歳のときに2カ月間ハーバード大学のサマースクールに語学留学をしました。私にとって生まれて初めての一人旅でした。そして、そこで出会った男性と結婚しました。

——ご結婚後は、演技の世界から少し距離を置いた印象があります。

女優業をお休みすると宣言したつもりはなく、私がおの時々にはできること、やりたいことを選んでいったら結果的にそうなっただけなんです。語学留学を終えて、再びアメリカの大学院に留学していた夫の元へと行ったのも、私自身、一度はアメリカでの暮らしを経験したいという思いがあったから。そして帰国後に夫の勤務地であった札幌で妊娠・出産。子育て中心の生活が始まりました。

女優の仕事から離れたのは、私は不器用なので、子育てと両立しようとしたらどちらも中途半端になる気がしたからです。そもそも撮影のために東京と札幌を行き来するのも現実的には難しいですよ。

でも、女優の仕事はできませんでしたが、その間にエッセイをたくさん書いて本にすることはできました。



上: デビュー当時(19歳)

下: 1981年「江戸の用心棒」に出演



ボランティアで行っている「大人と子供のための読みきかせの会」

## 一冊の絵本との出会い

——30代は子育てが中心。そして40代になると再び表現の道へ。特に絵本の読みきかせ活動を精力的に行われています。それを始めたきっかけを教えてください。

もともと私自身が絵本好きだったというわけではないんです。それどころか、絵本は私にとって子どもを寝かしつけるための単なる“道具”。娘が「読んで」と次々に持ってくる絵本を、「こんな本のどこがそんなに面白いんだろう」と思いながら、一分一秒でも早く寝てもらうために読んでいました。

でも、長女の5歳の誕生日プレゼントに知人から贈られた『つりばしゆらゆら』（あかね書房）という本が、私の“絵本観”をガラッと変えてしまったんですね。

『つりばしゆらゆら』は「こんすけ」というきつねの男の子が、つり橋の向こう側に同じ年ごろのきつねの女の子が住んでいると聞き、生まれて初めてつり橋を渡ろうとするお話です。友だちは「危ないから、もう少し大きくなってから渡ろう」と言うのですが、どうしてもこんすけは今の自分と同じ小さいきつねの子と遊んでみたい。大人にとっては些細に思えることでも、子どもにとっては何か挑戦してみる大きなきっかけになるんですね。

ゆらゆら揺れるつり橋に足をすくませながら、勇気を振り絞って、一人で雨の日も風の日も必死に練習するこんすけ。その姿がほんとうにいらしいのですが、結局は友だちに呼ばれて、後ろ髪をひかれる思いで歩みを止め、つり橋を渡ることなく物語は終わります。谷の向こうにいるまだ見ぬ女の子に「また いつか あそぼ」と言葉を残して。

本を閉じたとき、気がついたら泣いていました。私自身も小さなころから、頑張っても自分の力不足や周囲に心配をかけまいという思いからできなかったことはいくらでもあった。そして今、私も娘について「頑張れ」と言ってしまうけれど、どんなに頑張ってもうまくいかない、そんな出来事にこの先の人生

で一体どれだけ出会うんだろう……そうした想いが重なって、涙が止まらなくなったんですね。

『つりばしゆらゆら』に出会うまでは、絵本は子どものためのものだと思っていました。でも、本当にいい絵本は大人の心を動かし、忘れかけていた何かを呼び起こしてくれる。そして、そんなにもいいお話だったら、もっとたくさんの子どもたち、大人たちに知ってもらいたいと始めたのが「大人と子供のための読みきかせの会」です。どうせ朗読をするなら、音楽をつけたいし、大きな絵で見せたい。そんなふうに思っていたら、私の幼なじみや娘が通う幼稚園のママ友だちと自然に意気投合してできたグループです。活動は今年で11年目になります。

これまでたくさんの幼稚園や小学校、それに小児病棟などをまわってきましたが、会の活動はあくまでもボランティア。一人の母親として、女優・中井貴恵ではなく、本名の中澤貴恵子としてやっています。

——「大人と子供のための読みきかせの会」の公演はこれまでに900回を超えています。その原動力はなんですか？

最初から長くやろうと思っていたわけではありません。気がついたらここまで続いていました。メンバーのほとんどが子どもを持つお母さんで、続けてこられたのは家族の協力、支えも大きかったと思います。お客様の反応も、もちろん励みになります。ただ、人には必ず好き嫌いがありません。どんなにおいしく作ったつもりの料理でも、いろんな評価があって当たり前。だからどう思われるかを気にし過ぎず、ただ自分たちができる精一杯のことをやろうと考えています。

メンバーにとっては、好きな本に出会い、それをどう伝えるかという作業をみんなでワイワイ言いながらやっているときが一番楽しい時間。結局、一人ひとりがそうした純粋な気持ちを持っていることが長く続いている一番の理由のような気がします。

——絵本を通じて子どもとふれあう大切さが見直されています。今、子育て中の当社社員に、読みきかせのコツを教えてくださいませんか？

子どもたちにとって、ママやパパに抱っこしてもらい、肌の温もりを感じながら読んでもらうのが、やっぱり世界で一番の読みきかせ。技術は関係ありません。

ただ、ママだけじゃなくて、ぜひパパも読んであげてください。ママの優しい声だけでなく、パパの力強い声も子どもたちにとって素敵な贈り物です。

## 朗読×音楽の新しい挑戦、「音語り」

——最近、女優・中井貴恵として朗読と楽器演奏を融合させた新しい表現スタイル「音語り」を始めていますね。

「音語り」はジャズピアニストの松本峰明さんと一緒に絵本『あらしのよるに』（講談社）を2006年に上演したのが最初です。ふつうの朗読会は、朗読が主で、音楽がその引き立て役になってしまいがちですが、「音語り」はどちらも同じように聞き手の心に届けたいと思って始めました。先ごろは小津安二郎監督の映画『晩春』のシナリオを朗読用にアレンジし、上演しました。

実は小津先生は私の父と母の仲人でもあって、生前は中井家にもよく遊びにいらしていました。一緒に晩ご飯を食べたり、泊まっていかれたり、私自身も大変



可愛がっていただき、子どものころは「親切で楽しいおじいちゃん」としか思っていませんでした。けれど、大人になって、その方が独自の世界観を作り上げた映画界の巨匠“小津監督”だと知り、驚きもあって、逆に先生の映画は私には崇高で手の届かない“聖域”という感覚がずっとありました。

でも、数年前、ふと小津先生の作品を私なりのかたちで表現してみたいという思いが生まれたんですね。もし随筆があれば読んでみたかったのですが、残念ながら映画しかありません。もちろん映画を読んだ経験もないし、やはり“聖域”という思いもあります。それでかつて小津映画の制作スタッフだった山内静夫先生（現・鎌倉文学館館長）に相談したところ、「大丈夫だよ。貴恵なら小津さんもやっていいと言うよ」と背中を押してもらい、挑戦してみることにしたんです。山内先生に1年がかりでシナリオを朗読用にアレンジしていただき、5月に小津先生の生まれ故郷でもある東京・深川で初演をすることができました。

——最後に今後の抱負をお聞かせください。

今年の夏に、NHK交響楽団が演奏するメンデルスゾーンの曲に合わせてシェークスピアの『真夏の夜の夢』を朗読しました。オーケストラとの共演は私にとって初めての経験。とても感動し、いくつになっても新しい経験はできるのだと改めて思いました。

朗読は演技以上に難しいと感じます。本当に奥深い世界。だからこそもっと新しい、深い表現ができると思うし、これからも挑戦し続けていきたいですね。



子どものころ、小津監督に可愛がられた